448

沢目（さわめ）遺跡

（曽於郡大崎町大字益丸字松原）

位置と環境

遺跡は，志布志湾岸に沿って形成された砂丘地帯の黒色土層内に所在する。遺跡の南側は田原川と持留川が合流し，志布志湾へと流入している。また，本遺跡から約700m西側の台地上には，神領古墳群を含む神領遺跡が位置し，南西へ約1.5kmのところには国指定史跡である横瀬古墳がある。

写真１　沢目遺跡より志布志湾を臨む

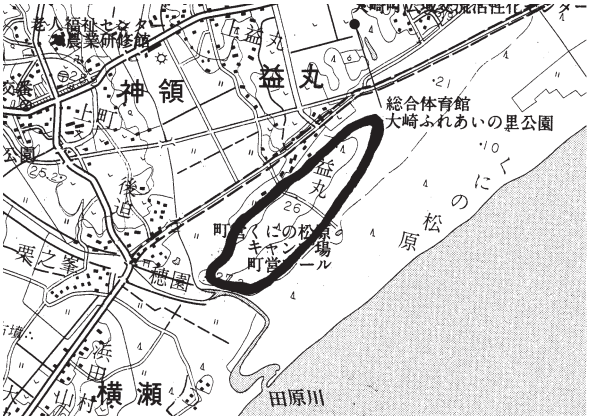
調査の経緯

民間の行う砂採取事業に伴い，厚さ約３～５ｍの砂丘下の黒色土層から多量の土器や石器類が出土し，平成11年度に砂採取計画地内での約1500m²について本調査を実施した。

遺構と遺物

調査では，弥生時代中期と弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期の遺物・遺構が発見された。検出された遺構は，黒色土層下の白砂層の上面

写真２　遺構検出状況



第１図　沢目遺跡の位置

で検出された（写真２）。

遺構内出土の土器の多くは，完形のまま押し潰された状態で発見され，完形の復元が可能であった。

弥生時代中期の土器は，入来Ⅱ式土器，山ノ口式Ⅰ・Ⅱ式土器が中心で，北麓式土器と思われるものも出土した。また，住居跡１からは山ノ口式土器の壺（写真３）とともに北部九州の須玖式の壺（写真４）と高坏が供伴して出土した。

須玖式土器の壺は，焼き上げてから後に意図的に

写真３　山之口式土器

写真４　須玖式土器

径が２㎝程の穴を数か所開けていることが判明し，埋葬関係の意図が推定される。また，高坏は全体的に丹塗りがしてある。

この時期の石器は，砥石，凹石，敲石なども多く出土している。これらの中には大型のものも多く確認され，砥石や凹石としての複数の用途を兼備えている。

特に，砥石は多く出土し，竪穴住居跡４で出土した鉄斧片（写真５）をはじめとする鉄製品との関係を示唆するものかと思われる。

石器は，磨製石鏃，打製石鏃，スクレイパーや，

写真５　鉄斧片出土状況

石庖丁片も１点も出土している。

そのほか，軽石への穿孔や，刻み込みなどの加工を施したものが出土し，中には舟を模した形態がはっきりしているものもある（写真６）。また，装飾品として管玉が２点出土した。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物については，中津野式土器（写真７），成川式土器，土師器

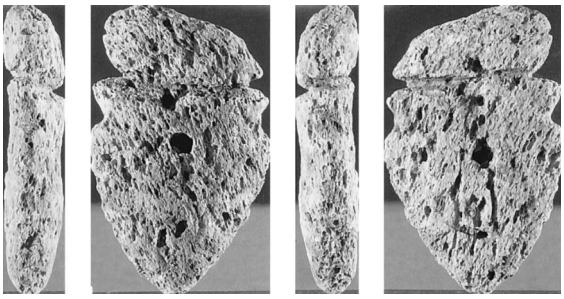


写真６　軽石製加工品（４面展開）

が出土している。また，竪穴住居跡５の床面からは畿内・瀬戸内地域に見られる布留式土器と呼ばれる古式土師器を真似て作られたのではないかと思われる土師器も発見された（写真８）。

特筆すべきは，竪穴住居跡５・６の中央部に中津野式土器，成川式土器，土師器が意図的に並べられ

写真７　中津野式土器

写真８　古式土師器

た状態で出土した事である。しかも，それぞれの住居跡の床面からかなり高い位置で出土しており，すなわち住居が使われなくなった後，埋め戻っている間で並べられたものである（写真９）。

写真９　住居跡５の遺物出土状況

遺構は，弥生時代中期の竪穴住居跡48軒，弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡５軒が検出された。また，土坑と考えられる遺構が約20基，柱穴約180基を検出した。

調査区における遺構の密度は高く，竪穴住居跡にいたってはＢ－１～３に集中して検出されている(第２図)。

弥生時代中期の竪穴住居跡か，弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴住居跡かは，ほとんどが埋土内の遺物で判別した。

これだけの竪穴住居跡が一帯に集中的に存在していることは，この地域が当時重要な生活圏であったことを示すものである。

特徴

遺物の内容から，九州北部から日向を通る九州東海岸ルートが早い段階で確立されていたことが考えられる。また，外来系と在地との土器の並行関係が把握でき，北部九州との交流のあり方が示唆できる。

当時の生活習慣を知る資料が得られたことや，県内では出土例の少ない鉄製品が出土したことも，この遺跡を特徴づけるものである。

大規模集落があったことを示す遺跡が砂丘に立地している例は，県内でも希少な例である。

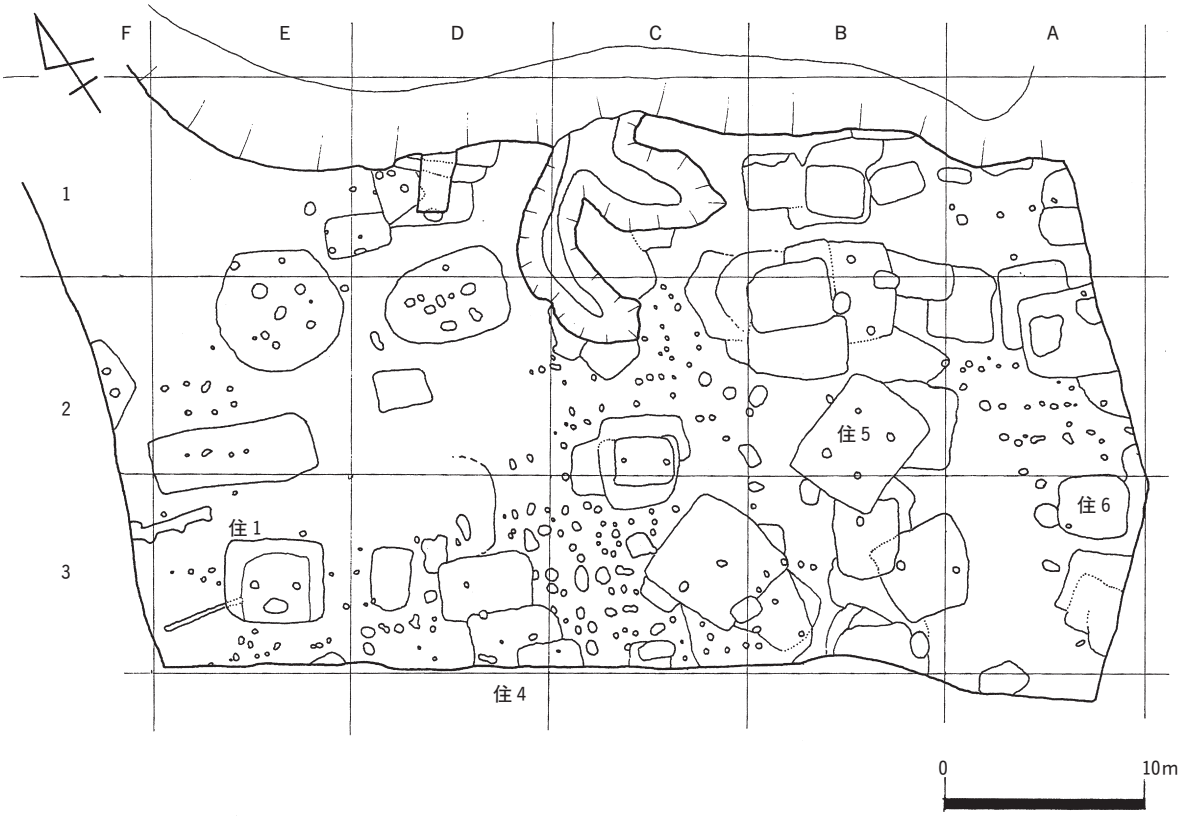
資料の所在

出土遺物は，大崎町教育委員会に保管されている。

参考文献

大崎町教育委員会2000「沢目遺跡」『大崎町埋蔵文化財発掘調査事業報告書』

（内村憲和）



第２図　遺構配置図